

ヤンの本はどのジャンルに属するのだろうか。挿絵が多いので絵本と思うかもしれない。たとえば「ヤンとカワカマス」や「善良なネコ」。それともファンタジー? (僕はこの軟弱な言葉が好きじゃない)。いつそのこと外国文学の方がありがたい。この国の文学が余りに無残だから。殺人、暴力、性、どーでもい

ような恋愛、つまらない内輪話、日常のおちまじした話そんなことにはか題材を見つけてることができないのか。問題は想像力の欠如。しゃれたユーモアの欠如。でもこのワットワしく閉塞(へいそく)した国で物語を書くことは難しい。それならいっそのこと人間外の世界を描いたらどうだろうか。たとえば全く新しい動物の文学、ネコの文学、ウサギの文学...

ここでかた懐かしい言葉を思い出す。初期サルトルの実存は本質に先行する。隲腐なネリシア哲学以来の二元論にすぎないのだけれど、議論はいい、さあ行動しようという宣言だった。六〇年代、危機にひんした実存は体制や權威に異議申し立ての行動を起こし、その波は世界をおおった。しかしアメリカを中心とした体制に打ち砕かれ七〇八〇、九〇年代と、粉々になった個々人の美しい実存のカタチは、次々と掃除機のように

ネコの「ヤン」とちょっとトボけた仲間たち

〈下〉

巨大資本に吸い込まれていったのだ。そして、やはりアメリカで生まれた情報革命と称する偽りのグローバル化の中で、僕らのわずかに残された本質すらも、情報資本によってかすめ取られようとしている。失われた十年という言葉を耳にする。しかしそれは、単にこの国の資本としての話だ。僕らの精神史の中で失われたのは、この三十年なのである。



ヤンはヤンとシメスの物語 (これは僕にとって心の本)

の中で、ロシアの聖者めいたちょっと風狂のクロライチョウから、「全てはくり返すよ」と決してくり返すことはないうで決してくり返すことはないうという言葉を聞く。そして「イスタンプルの占いウサギ」で、ヤンは革命の動乱を逃れてロシアからトルコにイスタンプルへと旅立って、落日のオスマントルコの都で、占いウサギが作り出す永遠帰郷の渦に巻き込まれそうになりながら、ヤンは二丁ニに反論する。「全てはくり返すよ」で、決してくり返すことはないので」と。

ヤンは生の「回性」の中で、自らの実存を純粋に生き抜くことにはないので」と。

ネコ文学の地平線

ネコなのだ。だからこ彼ら動物達は、この地上のあらゆる存在が自分達と同じように侵すことのできないそれぞれの世界を持ち、必死に生き抜こうとしていることを知っている。ヤン達の世界を読むとは、ヤンの実存のカケラを取り戻す手助けになると僕は信じる。そして取り戻した実存を、かすかに残っている僕達の本質「内なる自然と融合」させ、新たな反政の準備とすることを願う。

文学は哲学にも思想にも、もちろん人生の指針にもなりえない中途半端なモノだ。文学とはつまるところ、夢の中心

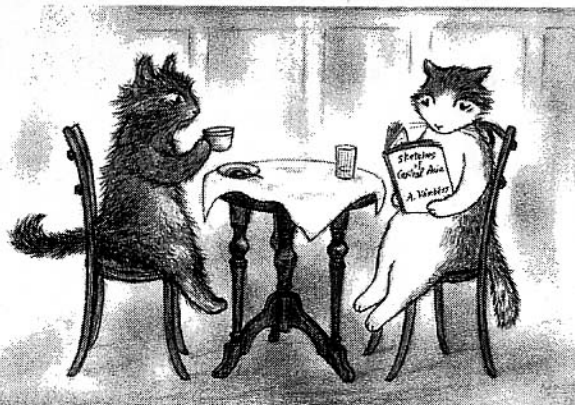
で起こった幻想であり、同時にほのかに希望なのだ。



五年のちようど各頃母を亡くした。今、僕は母からももらった民謡調のワイングラスを握っている。その時は言えなかったが、まあ僕の趣味じゃない品、落としてもなかなか割れない。仕方なく悲しみを注ぐ。なぜつまらないモノは残り、ヒトは消えるんだらう。

「まただ・じゅん」作家

いつものカフェに立ち寄り、トルキスタン潜入記の続きを読んでみる。ボウの前の席に彼が座った(小ネコちゃんて言ってみな(よ))



文化